慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	表記の和漢混淆：『宝物集』古写本の場合
Sub Title	
Author	片山, 久留美(Katayama, Kurumi)
Publisher	慶應義塾大学国文学研究室
Publication year	2016
Jtitle	三田國文 No.61 (2016. 12) ,p.66(17)- 82(1)
JaLC DOI	10.14991/002.20161200-0082
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00296083-20161200-0082

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

表記の和漢混淆
――『宝物集』古写本の場合

片山　久留美

1．目的と方法

1.1　目　的

平安時代において、文体と表記は「和文体のものはひらがな主体表記、漢文脈のものは漢字文あるいは漢字カタカナまじり表記」という対応関係を持っていた。中世に入ると、文体・語彙の面で和漢混淆が進み、それに伴い表記の上でも漢字ひらがなまじり表記で書かれるものが登場するようになっていったと考えられている。和漢混淆には文体・文法的な面での混淆、語彙的な面での混淆が考えられるが、表記の面ではひらがな主体表記と漢字カタカナまじり表記が混淆していくことになる。では、こうした文法・語彙・表記の和漢混淆はそれぞれに連動して起きたことであろうか。

本稿では鎌倉時代における漢字ひらがなまじり表記発生の過渡期的現象として、文体・語彙と表記の対応関係にさまざまなバリエーションがあったことの一例を提示したい。具体的には、平安時代末期頃成立とされる説話集『宝物集』を資料とする。和漢混淆現象が起きていた当時どのような表記がなされていたかを見ることに目的があるため、鎌倉時代を下らない時期の写本を見る必要がある。『宝物集』は鎌倉期書写とみられる古写本が複数現存し、漢字とひらがなによる表記のもの、漢字とカタカナによる表記のものとがある。『宝物集』は和漢混淆文体であることを確認したうえで、使用される語彙および表記体系には様々なあり方があったことを明らかにする。

1.2　『宝物集』について

『宝物集』は平安時代末期から鎌倉初期にかけて成立したとされる仏教説話集である。著者は平康頼とされる。内容は鬼界が島から帰洛した男が釈迦堂に参詣し、その釈迦堂で法師が参詣客に釈迦像渡来の由来を語る場面、深夜に数名の参籠者が宝物とは何かを論じ合う場面、それを受けて法師が宝物とは仏道であるということを語る場面が描かれる。仏典だけでなく漢籍・日本の説話・和歌集など多くの典拠を引きながら仏道の本質が語られる作品となっている。一般的には説話集に分類されるが、枠物語的な筋書きを持っていることが指摘される作品である。

『宝物集』の伝本研究は小泉（1973）により整理されている。『宝物集』には一巻本・

二巻本・三巻本・六巻本・七巻本といった多種にわたる異本が存在することが知られている。これらの中で鎌倉期の書写と考えられている古写本が光長寺本・本能寺本・最明寺本である。それぞれ現存する巻が異なる零本である。

光長寺本・本能寺本・最明寺本は小泉（1973）において第七類系に分類されている。第七類系は第二次世界大戦後に吉田幸一氏所蔵本（以下吉田本と呼ぶ）、瑞光寺本、松平家旧蔵本（以下松平本と呼ぶ）が発見されたことにより系統が明らかとなった諸本である。吉田本は９巻から成り、他の系統の本には見られない和歌を157首持ち、記事内容も豊富になっていることからそれまでの系統の諸本とは異なる本であると考えられている。瑞光寺本は７巻から成る点で分巻の体裁を吉田本と異にしているが、内容的には全く同系である。松平本は瑞光寺本と記事内容、字配り・丁数に至るまでほとんど合致している。刊記や書体等から、吉田本・瑞光寺本・松平本はいずれも江戸時代中期までの書写と見られる。

今回取り上げる光長寺本・本能寺本・最明寺本はこの第七類系統に属する本である。それぞれ吉田本・瑞光寺本・松平本と記事内容や含まれている和歌が一致し、他系には見られない本文を有している。吉田本とはややずれるものの、瑞光寺本・松平本とは分巻の位置も一致している。字体や紙質からいずれも鎌倉期の書写本である。

『宝物集』の鎌倉期書写と見られる古写本には光長寺本・本能寺本・最明寺本の他に宮内庁書陵部蔵本の存在が知られるが、一巻本系に分類されるものであり系統が異なるため今回は考察の対象から外すこととした。同系統に属する３本を分析対象とする。

以下の考察に用いる資料は小泉弘編『貴重古典籍叢刊８　古鈔本寶物集』（角川書店）収載の影印に拠った。各本の書誌の詳細を小泉（1973）および橋本（1939）を参考に挙げる。

光長寺本：巻一のみ現存。鎌倉中期書写。奥書に「寶物集一／弘安十年歳次丁亥二月一日書了／尺日春」とあることから、光長寺開祖日春上人筆とされている。巻子本の形で現存するが、原装は縦28㎝、横20㎝の冊子本と見られる。丁数は内題紙一紙を加え墨付き29丁である。最初の13、４面は９行、後半になると11、２行の場合も見えるが大体は一面10行となっている。漢字とカタカナを用いた表記。カタカナによる傍訓が見られる。書写年代と筆者を明らかにする最古の写本である。

本能寺本：巻三のみ現存。鎌倉末期書写。列帖装の一冊本である。墨付きは27丁。一面12行、一行30字前後。漢字とひらがなを用いた表記。一部にカタカナを含む。筆者は不明であるが、書風・字体・紙質が極めて古態を示していることから鎌倉末期を下らない書写と考えられる。

最明寺本：巻四のみ現存。鎌倉末期書写。胡蝶装の冊子本。墨付きは48丁だが虫損や本文の切り取りなどが見られる。漢字とひらがなを用いた表記だが一部にカタカナも交える。またカタカナによる傍訓が見られる。この本も書風・字体・紙質から鎌倉末期の

写本と見られている。

また、各本の所収説話の概略は以下の通りである。

巻一（光長寺本）：鬼界が島から帰洛した男が釈迦堂へ参詣する道行、釈迦像の由来および宝物の論

巻三（本能寺本）：六道のうち人道における八苦の中の「愛別離苦」「求不得苦」「五盛陰苦」

巻四（最明寺本）：成仏に通じる十二の道のうち「道心」「三宝」について

2．各本の文体的特徴

本稿では文体と表記との対応関係を観察することを目的とするため、まず三本それぞれの文体的特徴を確認していく。三本は同一系統の写本ではあるものの、残存する巻が異なることから当然内容も使用される語彙も異なっている。そこでまずそうした語彙的な問題に左右されない文法要素に着目し、三本の文体的特徴を考察する。

その文章が和文体であるか漢文訓読体であるかは一般に和文特有語・漢文訓読特有語をどの程度含むかによって判断される。ここでもその手法を用いる。特有語については築島（1963）および峰岸（1986）に取り上げられている助詞・助動詞の文法要素について、各本全文における使用状況を調査した。[(1)] なお和歌・漢詩漢文の引用部は文体の判定にはかかわらないと考え、調査範囲から外した。各本の特有語の使用状況をまとめたのが表１である。対応する和文特有語と漢文訓読特有語は同じ段に挙げた。

これを見ると、三本それぞれに和文特有語・漢文訓読特有語どちらも含んでいることがわかる。これらの古写本の本文の文体は典型的な和文体／漢文訓読体とは言えず、文法的には和漢混淆の進んだ文体であるといえる。

合計数を見ると光長寺本・本能寺本が和文特有語を、最明寺本が漢文訓読特有語をやや多く含む傾向にあるように見える。しかし本能寺本に使用の目立つ和文特有語の「せたまふ」や最明寺本に多く見られる漢文訓読特有語の「ゴトシ」は文体の違いというよりも、内容的に最高敬語を用いるような場面、比喩を用いるような場面がそれぞれ多かったためにこれらの語が頻出しているだけであると考えられる。

本能寺本の「せたまふ」の動作主は「小一条院」「村上の御門」「後朱雀院」「深草の御門」「中宮」など最高敬語を用いるべき天皇等が中心となっており、これら天皇の和歌や説話を引用する場面が多いために「せたまふ」の使用が増えているのである。最明寺本の「ゴトシ」についても、光長寺本や本能寺本に「ゴトシ」に対応する和文特有語の「やうなり」が多く見られるというわけではない。最明寺本の内容上、比喩的な表現を多く用いているために「ゴトシ」が頻出していると考えられる。

こうした各本の内容による影響を除けば、どの本も文法的には同じように和文特有語・漢文訓読特有語を含んでいるということができる。

【表１　各本の和文特有語・漢文訓読特有語の出現数】

光長寺本	本能寺本	最明寺本	和文特有語	漢文訓読特有語	光長寺本	本能寺本	最明寺本
5	1	2	す　さす	シム			
5		2	むず	ムトス			1
1		3	やうなり	ゴトシ	4	5	19
2	1	1	ぬ・ね(打消助動詞)	ザル・ザレ	1	1	1
8	4	1	にて	ニオイテ・ニシテ	1	1	1
2	2	2	で(打消接続助詞)	ズシテ		1	3
	1		ど	トイヘドモ	6	5	9
1	2	1	だに	スラ	1	1	
2	1	2	ままに	シタガヒテ			
2	2		して(格助詞)	ヲシテ	2		
12	16	19	はべり				
20	24	17	めり				
2	10		せたまふ				
				タリ(断定助動詞)	2	2	1
				ベカラズ	1		4
				シテ(接続助詞)		3	
62	64	50	計	計	18	19	39

先述のとおり、これらの諸本には漢字とカタカナを用いた表記のものも、漢字とひらがなを用いた表記のものもある。文法的には同じように和漢混淆を起こしている各本の表記体系にどのような違いがあるか、以下細かく観察していく。

３．表記上の特徴

3.1　全体の漢字表記率

まず漢字かなまじり文を考える上で重要になる漢字の使用状況を概観する。今回は「何が漢字で書かれ、何がかなで書かれているのか」という語と表記との対応関係を明らかにすることを重視するため、語を無視して漢字の使用数だけを数えるのではなく、本文を語ごとに分割してその表記を検討することとした。1.2で述べたように光長寺本の本文は29丁、本能寺本は27丁、最明寺本は48丁ある。総量の異なる各本を比較するために、本文を便宜的にいわゆる伝統文法の語ごとに分割[(2)]し、各本3000語程度を分析対象とした。光長寺本は15丁、本能寺本は20丁、最明寺本は17丁分に当たる。以降本論では特に注記のない場合、語形を歴史的仮名遣い・カタカナで表記し、その語の一般的な漢字表記を括弧内に漢字で示すこととする。

まず、各本の漢字使用率を見ていく。それぞれの本の語のうち、漢字を含む表記をしている語[(3)]の割合を延べ語数で品詞ごとにまとめたのが表２である。

これを見るとこれらの本は内容的に違いがあるとはいえ、30％程度の漢字表記語を含んでいることがわかる。ひらがなまじりの本、カタカナまじりの本という違いがあって

【表 2　各本の品詞ごとの延べ語数と漢字表記率】

	光長寺本			本能寺本			最明寺本		
	全語数	漢字表記語数	漢字表記率	全語数	漢字表記語数	漢字表記率	全語数	漢字表記語数	漢字表記率
動詞	745	251	33.7%	595	214	36.0%	592	129	21.8%
形容詞	79	10	12.7%	71	10	14.1%	68	3	4.4%
形容動詞	16	2	12.5%	18	1	5.6%	20	3	15.0%
名詞	894	706	79.0%	713	589	82.6%	910	667	73.3%
数詞	19	19	100.0%	36	35	97.2%	48	47	97.9%
代名詞	9	4	44.4%	17	2	11.8%	11	0	0.0%
副詞	43	13	30.2%	36	8	22.2%	44	11	25.0%
連体詞	23	17	73.9%	14	7	50.0%	27	5	18.5%
接続詞	15	11	73.3%	2	0	0.0%	2	0	0.0%
助詞	**1185**	**1**	**0.1%**	**793**	**6**	**0.8%**	**950**	**0**	**0.0%**
助動詞	**454**	**15**	**3.3%**	**377**	**14**	**3.7%**	**315**	**0**	**0.0%**
計	3482	1049	30.1%	2672	886	33.2%	2987	865	29.0%

も、漢字表記の語を含む割合は同程度なのである。同じ鎌倉中期書写の『古本説話集』（ひらがなと漢字を用いた表記）で同様の調査をすると漢字表記率15%程度であった[(4)]ことを考えると、この数値はかなり高いものであるといえる。ひらがなをまじえた表記の本能寺本・最明寺本も、ひらがな主体表記と呼べるものではない。『宝物集』古写本三本は、文体的には和漢混淆文、表記の面では漢字カタカナまじり表記／漢字ひらがなまじり表記であるように見える。

3.2　機能語の表記

表 2 に太字で示した通り、3 本ともに助詞・助動詞といった機能語の類は漢字表記されることが極めて少ない。光長寺本に見られる漢字表記の助詞 1 例は接続助詞「ドモ（共）」、本能寺本に見られる 6 例は接続助詞「ドモ（共）」が 4 例、終助詞「ガナ（哉）」が 1 例、副助詞「バカリ（斗）」が 1 例となっている。いずれも当て字的に漢字を用いた表記の例である。助動詞に見られる漢字表記例は、光長寺本・本能寺本ともにすべて断定「ナリ（也）」である。ほぼ文末における終止形の形での出現であり、固定的な表記であった可能性がある。最明寺本には助詞・助動詞の漢字表記は全く見られず、光長寺本・本能寺本はわずかに漢字表記が見られるものの、基本的には 3 本ともに機能語は仮名表記をするという性質を持っていると考えられる。

機能語は 3 本ともに仮名表記するという性質が確認された。そこで本論では、以下概念語に焦点を当て考察を進めていく。文の主な意味を担う概念語の中で、特に名詞と動詞の表記について詳細に検討する。

3.3　漢語の概念語の表記

まず、語彙の面から３本を見ていく。３本に出現する概念語を和語と漢語とに分けて延べ語数で集計したのが表３である。漢語を見てみると、どの品詞においてもほぼすべて漢字表記されている。光長寺本で仮名表記されている漢語名詞は「キンヤ（禁野)」、「ヤウ（様)」など数例、本能寺本は「シュウ（主)」１例のみ、最明寺本は「サイシャウ（宰相)」「セウセウ（少々)」「ヤウ（様)」など数例が見られる。

概念語のうち、漢語については３本に共通して安定して漢字表記されることがわかった。３本の表記体系にかかわらず、漢語を多く含めば漢字表記率は当然高くなるし、漢語が少なければ低くなることになる。

今回調査する３本は現存する巻が異なるため、内容・使用される語彙も大きく異なっている。表３にあるとおり、漢語の延べ語数では最明寺本が他２本に比べてかなり多くなっているが、これは最明寺本の巻四は法師が成仏に通じる十二の道を論じる場面が主に描かれ、経典や漢籍に典拠を持つ漢語を他の２本に比べ多く含んでいるためである。

光長寺本は、宝物とは何かを参籠者が問答する部分では漢語・仏教語が多く登場するものの、冒頭の男の道行部分なども含まれるため最明寺本ほど漢語の使用が多くはなっていない。

本能寺本は「愛別離苦」等の八苦の説明を中心としているが、そこでは和歌を多く引用しながらの解説が中心となっており、地の文にも漢語の使用はさほど多くない。

漢語はほぼ全て漢字表記し、機能語は仮名表記するという性質を３本が共通して持つことから、３本の表記のちがいを表しているのは和語の概念語の表記によるものであるといえる。よって以下機能語・漢語は除き、和語の概念語について３本の表記体系の違いを考察していくこととする。

【表３　各本の和語・漢語の延べ語数と漢字表記率】

		光長寺本			本能寺本			最明寺本		
		全語数	漢字表記語数	漢字表記率	全語数	漢字表記語数	漢字表記率	全語数	漢字表記語数	漢字表記率
和語	名詞	602	421	69.9%	466	343	73.6%	468	211	45.1%
	動詞	745	251	33.7%	591	211	35.7%	589	126	21.4%
	形容詞	79	10	12.7%	71	10	14.1%	68	3	4.4%
	形容動詞	15	1	6.7%	16	0	0.0%	19	2	10.5%
	計	1441	683	47.4%	1144	564	49.3%	1144	342	29.9%
漢語	名詞	287	282	98.3%	238	237	99.6%	437	426	97.5%
	動詞	0	0	0.0%	4	3	75.0%	3	2	66.7%
	形容詞	0	0	0.0%	0	0	0.0%	0	0	0.0%
	形容動詞	1	1	100.0%	2	1	50.0%	1	1	100.0%
	計	288	283	98.3%	244	241	98.8%	441	429	97.3%

3.4　和語の概念語の表記

表３に見られるように、和語名詞・和語動詞は３本の漢字表記率に違いがある。いずれも光長寺本・本能寺本に比して最明寺本の漢字表記率が低くなっている。名詞・動詞それぞれについて詳しく見ていく。

3.4.1　和語の名詞の表記

3.4.1.1　３本に共通する和語名詞の表記

内容の異なる３本であるが、共通して現れる語もある。まずはこうした３本に共通して現れた和語名詞を漢字表記・仮名表記ごとに分けて一覧する。

［A］３本とも漢字表記優勢の名詞(5)（括弧内の漢字は実際の写本で使用された漢字）

イヘ（家）K3：0／H1：0／S4：0
ウタ（歌）K7：3／H11：0／S2：0
クニ（国）K2：0／H1：0／S3：0
ココロ（心）K10：0／H10：1／S12：0
ココロザシ（心さし）
K1：0／H1：0／S1：0
タマ（玉）K17：1／H1：0／S1：0
チ（地）K1：0／H2：0／S1：0
チカラ（力）K1：0／H2：0／S1：0
ツキ（月）K3：0／H7：0／S2：0
トキ（時）K5：0／H2：0／S5：0
ナ（名）K1：0／H1：0／S1：0
ナカ（中）K10：0／H6：0／S10：0
ハハ（母）K1：0／H5：0／S1：0
ハル（春）K6：0／H3：0／S2：0
ヒト（人）K34：0／H18：0／S28：0
ホトケ（仏）K23：0／H1：0／S3：0
ミヅ（水）K4：0／H2：0／S5：0
ワレ（我）K6：0／H6：0／S1：0

［B］３本とも仮名表記優勢の名詞

オコナヒ（行）K0：1／H0：1／S0：1
タビ（旅）K0：1／H0：1／S0：2
ニホヒ（匂）K0：1／H0：1／S0：1
ママ（儘）K0：1／H0：1／S0：1
ヨシ（由）K0：1／H0：1／S0：2

［C］３本の表記が共通していない名詞

アカツキ（暁）K1：0／H0：2／S2：0
イロ（色）K1：1／H1：1／S0：3
ウチ（内）K3：1／H1：2／S0：2
ウヘ（上）K1：1／H2：1／S0：1
カゼ（風）K2：0／H3：1／S0：3
カタ（方）K0：2／H0：2／S1：0
キサキ（后）K0：1／H1：0／S4：0
キミ（君）K2：0／H2：0／S1：2
コ（子）K4：0／H2：0／S1：2
コト（事）K22：1／H23：1／S0：31
コロ（頃）K0：3／H8：2／S0：1
コロモ（衣）K1：0／H1：0／S0：1
コヱ（声）K1：2／H3：1／S0：3
サキ（先）K1：0／H2：1／S0：2
タメ（為）K3：3／H0：1／S0：2
トコロ（所）K2：4／H3：0／S4：1
ノチ（後）K2：0／H9：1／S4：7
ハジメ（始）K1：1／H1：0／S0：2
ヒトリ（一人）K1：1／H0：1／S1：0
フミ（文）K1：0／H1：2／S1：1
ホカ（他）K1：0／H2：1／S0：2
ホド（程）K12：1／H1：4／S0：5

マコト（誠）K6：1／H1：0／S2：4
ミ（身）K5：0／H1：0／S0：1
ミカド（帝）K2：0／H2：0／S0：2
ムカシ（昔）K3：0／H2：0／S0：2
モノ（物）K20：1／H11：2／S2：7
ヤマ（山）K1：0／H1：0／S2：3
ユメ（夢）K3：0／H1：0／S1：3
ユヱ（故）K7：1／H4：1／S0：8
ヨ（世）K2：3／H5：0／S1：2
ヨル（夜）K2：0／H6：0／S0：1

これらのうち、各本で確実な分布が見られるある程度用例数のある語を見てみよう。各本で5例以上の例が見られる例（一覧中に下線太字で示したもの）を見てみると、「ココロ」「ナカ」「ヒト」が3本とも漢字表記優勢、「コト」「モノ」「ユヱ」が光長寺本・本能寺本で漢字表記優勢となっている。「ココロ」「ナカ」「ヒト」は延べ語数も多く、常に安定して漢字表記される名詞であったと考えられる。

［C］3本の表記が共通していない名詞のうち、網掛けをしてある語は最明寺本のみ仮名表記が優勢となっている語である。32語中19語が該当し、最明寺本が他2本に比べて和語名詞を仮名表記しやすいという性質を見て取ることができる。

3.4.1.2　接頭辞「御」のつく和語名詞

名詞の中には接頭辞「御」が付いているものがある。3本に現れる接頭辞「御」を確認してみると、「御」自体はすべての例で漢字表記されている。表4に接頭辞「御」に後続する和語名詞を一覧した。「御」がつかず名詞単独で用いられる場合がある語についてはその際の表記も合わせて一覧した。これを見ると基本的に各本ともに「御」がついてもつかなくても同様の表記をしていることがわかる。後続名詞の側から見ると、漢字表記の接頭辞「御」がついたからといって「御」がない場合に仮名表記される名詞が漢字表記されるようになるというわけではない。また接頭辞「御」の側から見ると、後続名詞が仮名表記であっても「御」自体は必ず漢字表記される。このように接頭辞「御」は後続名詞の表記に関係なく常に漢字表記されるものであることが確認された。(6)

3.4.2　和語の動詞の表記

次に3本に共通して現れた動詞を一覧する。

［A］3本とも漢字表記優勢の動詞（括弧内の漢字は実際の写本で使用された漢字）

サブラフ（候）（本動詞）
K4：0／H1：0／S1：0
タマフ（給）（補助動詞）
K42：1／H48：1／S44：2
ノタマフ（の給）K5：1／H1：0／S3：0
ハベリ（侍）（本動詞）
K30：4／H34：0／S8：0
ハベリ（侍）（補助動詞）
K13：3／H31：0／S16：0
マウス（申）K34：0／H23：0／S17：0

［B］3本とも仮名表記優勢の動詞

アハス（合）K0：1／H0：1／S0：2
アリ（有）K4：36／H2：17／S0：29
ウ（得）K2：7／H0：2／S0：3
ウス（失）K0：1／H0：7／S0：8
ウツ（打）K0：7／H0：4／S0：4
ウツス（移）K0：7／H0：1／S0：1

【表 4　接頭辞「御」に後続する和語名詞】

		「御」のある場合		「御」のない場合	
		漢字表記	仮名表記	漢字表記	仮名表記
光長寺本	カタチ(形)	1	0	1	0
	コシ(輿)	1	0		
	コト(事)	2	0	21	1
	コトヅメ(琴爪)	1	0		
	コトバ(言葉)	1	0	1	0
	スガタ(姿)	0	1	0	3
	タメ(為)	0	1	3	3
	トキ(時)	4	0	5	0
	ハハ(母)	1	0	1	0
	ハラ(腹)	1	0		
本能寺本	イロ(色)	0	1	1	1
	カタ(方)	1	0	0	2
	コ(子)	1	0	2	0
	コト(事)	1	0	23	1
	トキ(時)	1	0	2	0
	ココロ(心)	1	0	10	1
	ハテ(果)	0	2		
	ハジメ(始)	1	0		
最明寺本	アソビ(遊)	0	1		
	イヘ(家)	1	0	4	0
	イミ(忌)	0	1		
	コ(子)	5	0	2	1
	ココチ(心地)	1	0		
	トキ(時)	2	0	5	0
	トシ(年)	0	1	0	2
	トモ(共)	1	1		
	ハハ(母)	3	0	1	0

オクル（遅）K0：1／H0：5／S0：1
オコナフ（行）K1：2／H0：2／S0：1
オハシマス（御）K0：6／H0：2／S0：3
オハス（御）K0：3／H0：2／S0：5
オボユ（覚）K0：8／H0：2／S0：2
カク（書）K0：2／H0：2／S0：1
カナシム（悲）K0：3／H0：3／S0：1
カハル（変）K0：4／H0：4／S0：2
コモル（籠）K0：1／H0：1／S0：5
サス（差）K0：5／H0：1／S0：2
サリ（然）K0：7／H0：1／S0：2
シカリ（然）K0：1／H0：1／S0：2
シゲル（茂）K0：1／H0：1／S0：1
シル（知）K1：7／H0：8／S0：4
ス（為）K0：25／H0：18／S0：50
スグ（過）K0：8／H0：1／S0：2
スグル（優）K0：1／H0：1／S0：4
タテマツル（奉）（本動詞）
K0：2／H0：1／S0：1
ツク（付）K0：2／H0：3／S0：1

ナゲク（歎）K0：2／H1：7／S0：2
ナス（成）K0：2／H0：2／S0：2
ハジム（始）K0：1／H0：1／S0：2
ヒク（引）K0：1／H1：2／S0：1
フク（更）K0：1／H0：1／S0：1
フス（伏）K0：1／H0：2／S0：1
マカル（罷）K0：1／H0：4／S0：2
マヌガル（免）K0：1／H0：3／S0：1
マヰル（参）K0：7／H0：6／S0：3
メス（召）K0：1／H0：2／S0：3
モツ（持）K0：7／H0：5／S0：7
モトム（求）K0：5／H0：1／S0：7
ヨム（読）K0：10／H0：34／S0：10

［C］3本の表記が共通していない動詞

イフ（言）K27：18／H4：22／S0：19
オコス（起）K1：0／H0：1／S0：1
カクル（隠）K1：0／H0：17／S0：2
クル（暮）K0：2／H2：1／S0：2
サル（去）K0：1／H1：0／S0：1
タヅヌ（尋）K0：3／H1：0／S0：1
タテマツル（奉）（補助動詞）K6：6／H0：1／S0：4
トル（取）K6：5／H0：2／S0：5
ナラフ（習）K1：0／H0：1／S0：1
ユク（行）K1：4／H6：4／S0：2

出現頻度が3本ともに5例以上ある動詞を下線太字で示した。これらのうち、補助動詞の「タマフ」、本動詞・補助動詞の「ハベリ」、「マウス」が3本とも漢字表記優勢、「アリ」「ス」「モツ」「ヨム」が3本とも仮名表記優勢、「イフ」が光長寺本のみ漢字表記優勢となっている。動詞では「タマフ」「ハベリ」「マウス」が特に安定して漢字表記されている。

安定して漢字表記される動詞について、櫻井（1990）に慶長年間の書写とされる『宇治拾遺物語』伊達本の調査がある。これは敬語の動詞について調査したものであるが、漢字を中心として表記される敬語動詞として「仰す・仰らる・給ふ・給はす・うけ給はる・の給ふ・の給はす・候ふ・給はる・侍り・申す」が挙げられている。櫻井氏は「サブラフ」「タマフ」「ハベリ」「マウス」などは本動詞としての用法も補助動詞としての用法も漢字表記が中心となっていることを指摘している。

今回の調査でも、「タマフ」は補助動詞としての使用しか見られないが、「ハベリ」は本動詞・補助動詞ともに漢字表記優勢となっているほか、「サブラフ」「ノタマフ」「マウス」なども漢字表記優勢となっており、櫻井（1990）の調査結果と重なる部分が多い。櫻井氏は竹内（1988）の『源氏物語』河内本の調査、柏谷（1988）の『校本枕冊子』の調査においてもこれらの動詞が漢字表記される傾向があることを確認した上で、『宇治拾遺物語』の敬語表記の体系は『源氏物語』『枕草子』などの11世紀の和文体の表記法の体系であると結論づけている。

今回3本で安定して漢字表記されていた動詞は和文体のひらがな主体表記の本であっても常に漢字表記される語であったと考えられる。つまりこれらの語は文体・表記体系に関わらず漢字表記されるものであり、今回の3本の表記を特徴づけるものではないの

である。

3.4.3　和語の概念語の漢字表記率

３本に共通する和語の名詞・動詞について見てきた。３本に安定して漢字表記・仮名表記される語は３本の表記体系の違いを反映するものではない。つまり安定して表記される語を除くことで、よりそれぞれの本の表記体系の特徴を掴むことができることになる。

そこで安定して漢字表記される名詞「ナカ」「ヒト」「ココロ」、そして接頭辞「御」を含む語、漢字表記される動詞「タマフ」「ハベリ」「マウス」、仮名表記される動詞「アリ」「ス」「モツ」「ヨム」を除いた上で、各本の和語の概念語の漢字表記率を延べ語数によって示したのが表５である。

【表５　和語の概念語の漢字表記率（延べ語数）】

	光長寺本			本能寺本			最明寺本		
	漢字表記	仮名表記	漢字表記率	漢字表記	仮名表記	漢字表記率	漢字表記	仮名表記	漢字表記率
名詞	354	181	66.2%	298	122	70.9%	149	229	39.4%
動詞	122	419	22.5%	75	306	19.7%	17	364	4.5%
形容詞	10	69	12.7%	10	61	14.1%	3	65	4.4%
形容動詞	1	14	6.7%	0	16	0.0%	2	17	10.5%
計	487	683	41.6%	383	505	43.1%	171	675	20.2%

名詞については、表３で確認した漢字表記率と大きく変化があるわけではない。安定して漢字表記される語を除いても、やはり光長寺本・本能寺本の漢字表記率が高く、最明寺本が40％程度と低くなっている。共通して漢字表記・仮名表記される語を除いた各本の名詞の表記別の異なり語数は表６のようになっている。表記別の異なり語数においても最明寺本は漢字表記語が少なく、光長寺本・本能寺本は漢字表記語の割合が多くなっている。

【表６　和語名詞の表記別の異なり語数(7)】

	光長寺本	本能寺本	最明寺本
漢字表記のみ	99	111	63
漢字表記優勢	12	16	4
同程度	19	5	2
仮名表記優勢	7	3	8
仮名表記のみ	99	73	86

【表７　和語動詞の表記別の異なり語数】

	光長寺本	本能寺本	最明寺本
漢字表記のみ	16	18	7
漢字表記優勢	7	7	1
同程度	7	5	1
仮名表記優勢	19	9	3
仮名表記のみ	129	130	156

さらに顕著に違いが現れたのは動詞である。こちらも表３での傾向に変わりはないが、常に漢字表記される動詞を除くと最明寺本の漢字表記率が4.5％と極めて低くなっていることがわかる。他２本が20％程度の漢字表記率を保っているのに対し、最明寺本は共通して漢字表記されるものを除くと漢字表記される動詞がほとんどないのである。共通して漢字表記される動詞を除いた各本の表記別の動

詞の異なり語数は表７のようになっている。これを見ても最明寺本の漢字表記される動詞の少なさがわかる。また3.4.2の［C］３本の表記が共通していない動詞の一覧を見てもわかるように、他２本で仮名表記されて最明寺本のみ漢字表記という動詞はなく、他２本に比べて最明寺本が最も動詞の仮名表記の傾向が強いといえる。

以上のことから、光長寺本・本能寺本は和語の概念語について漢字表記する割合が高くなっており、最明寺本は他２本に比して明らかに和語の概念語の漢字表記の割合が低いことが確認された。本能寺本と最明寺本は同じひらがなをまじえた表記体系を持つ本であるとはいえ、その表記の本質は大きく異なっている。最明寺本は和語の概念語を漢字表記しないという和文体的なひらがな主体表記に近い性質を表しているのに対し、本能寺本は和語の概念語を多く漢字表記する漢文訓読体系の漢字カタカナまじり表記に近い性質を表しているのである。

3.1の表２で確認したように、３本の全体の漢字表記率は30％前後と同程度であった。しかし何が漢字で書かれているかという内実は大きく異なっている。和語の概念語を漢字表記しにくい最明寺本は、語彙的に漢語を多く含むために見かけ上他２本と同程度の漢字表記率になっていたに過ぎないのである。

3.5　小字表記とふりがな

ここまで和語の概念語の表記から３本の表記体系の違いを検討してきたが、これら３本には他にも特徴的な違いが見られる。それは小字やふりがなの使用である。以下こうした小字・ふりがなの使用について観察する。

3.5.1　小字表記の使用

まず光長寺本に見られる小字にどのようなものがあるか、以下に一覧する。

格助詞　375例
接続助詞　28例
助動詞　31例
形容詞活用語尾（黒ク、久キなど）　４例
動詞活用語尾（思ヒ、侍リなど）　70例
漢語サ変動詞のサ変部分（供養シ、持シ、利益シ）　３例
名詞の語末部分（クヒ物ノ、昔シ、前ヘ、我レなど）　９例
動詞　14例

光長寺本に現れる小字は助詞類が最も多い。また動詞の活用語尾部分のみを小字表記する例も見られる。動詞全体を小字表記する例としては「イフ」が「〜ト云フ」「申云ク」などの形で表記される例が見られた。名詞の語末部分、いわゆる捨て仮名部分の小字表記もある。助動詞はキ７例・ケリ２例・ジ１例・ス２例・タリ（完了）１例・ツ１例・ナリ（断定）８例・ヌ２例・ム４例・メリ１例・リ２例となっている。

一方最明寺本の小字表記は調査範囲に134例見られるが、すべて格助詞・接続助詞である。光長寺本に見られる活用語の活用語尾部分・名詞の語末部分などの小字表記は全く見られない。

光長寺本の動詞活用語尾の小字表記70例のうち11例が「タマフ」、23例が「ハベリ」という３本で共通して漢字表記された動詞である。一方最明寺本では、動詞が漢字表記される場合に活用語尾部分が表示されることが極めて少ない。補助動詞の「タマフ」は最明寺本でも44例の漢字表記が見られるのだが、そのうち活用語尾部分を表記しているのは５例のみである。「ハベリ」も本動詞・補助動詞合わせて24例の漢字表記例があるが、活用語尾が表記されている例は一つもない。活用語尾が表示されない理由については検討する必要があるが、最明寺本は動詞を漢字で書く場合そもそも活用語尾を表記しないという特徴が存在するために小字表記の出現が助詞類に偏っているものと考えられる。

また本能寺本には小字の使用は一切見られない。小字については、いわゆる捨て仮名や動詞「イフ」での使用などがあることから光長寺本が最も多様に用いているといえる。一方で助詞類に使用が偏っているとはいえ、最明寺本の小字表記も和文体に対応するひらがな主体表記には見られない大きな特徴となっている。

3.5.2　ふりがなの使用

次にふりがなについて見てみよう。光長寺本にはカタカナのふりがなが多く見られる。ふりがなは基本的に漢字表記された語に対応する形で付されているが、他２本に見られない特徴として動詞に後続の助詞・助動詞部分まで本行でなくふりがなで表されている例がある。たとえば「発」という漢字一字に対して「ヲコシテ」というふりがなが付されていたり、「有」一字に対して「アラン」というふりがなが付されていたりするのである。

最明寺本は本行部においてはひらがなを交えた表記体系を持つにもかかわらず、ふりがなは全てカタカナによって付されている。名詞につくふりがなが528例を数える。活用語に付されるふりがなは、光長寺本で形容詞に７例、形容動詞に２例、動詞に57例あるのに対し、最明寺本は形容詞２例、形容動詞３例、動詞13例と少なくなっている。最明寺本のふりがなの多くは名詞に付けられているように見えるが、これは最明寺本の漢字表記される和語動詞が少ないからに過ぎない。最明寺本では、「サダム（定）」「シヌ（死）」等の頻度の少ない漢字表記動詞にはふりがなが付してある。一方「タマフ」「ハベリ」「マウス」等の頻度の高い動詞にはふりがながない。これらの語は３本に共通して漢字表記される動詞であり、ふりがながなくても当時読み慣れた語であったと考えられる。これら高頻度のもの以外の漢字表記動詞にはふりがなを付していることから、最明寺本も光長寺本と同様に、活用語にもふりがなを付す性質を持っていると見られる。

光長寺本では和語に付されたふりがなが206か所、漢語に付されたふりがなが103か所

あり、最明寺本では和語に付されたふりがなが151か所、漢語に付されたふりがなが386か所となっている。最明寺本の漢語に付されたふりがなが多くなっているが、それは最明寺本が漢語名詞を多く含みそれらにふりがなを付していることと、和語動詞の漢字表記率が低いためにふりがなを付けられる和語動詞が少ないことの影響である。

本能寺本はほとんどふりがなが付されている様子は見られない。しかし、小泉（1971）は本能寺本について、「漢字に付せられていたふり仮名は殆んど削り取られているが、たまたま削り残った「遅々（チヽ）」「崑（コン）」「里（リ）」等から、片仮名を用いたことが明らかである」としている。影印本からこうした形跡を読み取ることは極めて困難であるが、この記述から本能寺本にもふりがなが使用されており、しかもそれがカタカナによるものであることがわかった。本能寺本も最明寺本と同じく、ひらがなまじりの表記体系を持つ本でありながらふりがなはカタカナによって付されていたのである。

このようにひらがなまじり表記の本能寺本・最明寺本にカタカナによるふりがなが使用されていることも、従来のひらがな主体表記には決して見られないものである。最明寺本については動詞などの活用語にもふりがなを付す性質を持つという光長寺本に近い使用実態が明らかになった。

4．結　論

2章で確認したように、3本は文体的にはみな和漢混淆の文体を持っていた。しかし3本の表記体系には大きな違いがあることが明らかになった。

3.1で見たように、3本は見かけ上は30％前後という同程度の漢字表記率を示していた。しかしその実態は、和語の概念語の漢字表記率が高くなっていた本能寺本とは異なり、最明寺本においては和語の概念語の漢字表記率は低く、語彙的に漢語を多く含むために全体の漢字表記率が上がっているといった違いがあることがわかった。漢語をどの程度含むかという語彙的な問題や、常に仮名表記される機能語、表記体系にかかわりなく常に漢字表記・仮名表記される語の存在など、表記体系自体にかかわらないものの影響を排除していくことで、3本の表記体系の本質には大きな違いがあることが明らかとなったのである。

和語の概念語の漢字表記率という観点から見ると、光長寺本・本能寺本が高い漢字表記率を示し、最明寺本が低くなっていた。表記に使用される字種との関係を合わせて考えると、カタカナを交えた表記体系を持つ光長寺本の和語の概念語の漢字表記率が高いことと、ひらがなを交えた表記体系を持つ最明寺本の漢字表記率が低いことは、平安時代までの漢文訓読体と漢字カタカナまじり表記、和文体とひらがな主体表記との関係と変わるところがない。しかし、ひらがなを交えた表記体系である本能寺本が和語の概念語の高い漢字表記率を示していることは、明らかに従来のひらがな主体表記とは異なっ

ており、表記体系そのものが和漢混淆したものであると考えられる。

一方、ふりがなや小字の使用においては、漢字カタカナまじり表記に特有の小字・カタカナによるふりがなが、ひらがなを交えた表記の最明寺本に見られた。和語の概念語の漢字表記率の面ではひらがな主体表記の性質を示していた最明寺本も、光長寺本と同じような小字・カタカナによるふりがなの使用をしているという点では漢字カタカナまじり表記の影響を受けているといえる。本能寺本にもカタカナによるふりがなの使用が認められており、ここでも漢字カタカナまじり表記との混淆が窺える。

以上のことから、文体の和漢混淆によって生じたとされる漢字ひらがなまじり表記体系には、その由来に２つのバリエーションが考えられることが指摘できる。

① 和語の概念語を漢字表記するという漢字カタカナまじり表記体系の性質を持つものが、カタカナで表記していた部分をひらがな表記するように変化したもの…本能寺本

② 和語の概念語は仮名表記するというひらがな主体表記の性質を保ったまま、漢語を多く含むようになることで漢字の使用率が上昇したもの…最明寺本

光長寺本については表記体系としては典型的な漢字カタカナまじり表記体系を持っているとみられるが、語彙的には和語を多く含んでいるという点で和漢混淆が起きているといえる。こういった本のカタカナ表記部分がひらがな表記へと変化することで、本能寺本のような漢字ひらがなまじり表記体系が生じると考えられる。

漢字ひらがなまじり表記発生の過渡期的な段階では本能寺本や最明寺本のように文体と語彙・表記体系の変化が連動していない様々なバリエーションがあったと考えられる。同時代の他の作品・写本についても表記の見かけ上に影響を与える様々な要素を除いて観察していくことで、文体・表記の和漢混淆から生じる漢字ひらがなまじり表記の実態を解明していくことを今後の課題としたい。

注

（１） 峰岸(1986)に所収の「説話文学作品に見える二形対立の用語」に示される語のうち、助詞・助動詞の項に挙げられているものと、築島（1963)・峰岸（1986）に挙げられる和文／漢文訓読特有の助詞・助動詞を調査した。峰岸(1986)「説話文学作品に見える二形対立の用語」には対応する和文特有語・漢文訓読特有語として以下のものが挙げられている（ひらがな表記のものが和文特有語、カタカナ表記のものが漢文訓読特有語である)。

助動詞：(1)使役　す・さす／シム　(2)推量　むず／ムトス　(3)比況　やうなり／ゴトシ　(4)否定　ぬ・ね／ザル・ザレ

助詞：(1)格助詞　して／ヲシテ・ヲモテ　に／ガタメニ　にて／ニオイテ・ニシテ　にて／ヲモテ　(2)接続助詞　て／シテ　で／ズシテ　ど／トイヘドモ　ままに／ニシタガヒテ　(3)副助詞　だに／スラ

（２） 各本の本文を翻字し、品詞分解を行った。品詞・語の判定には『日本国語大辞典第２版』などを参考にした。和歌・漢詩漢文の引用部は本文とは表記体系が異なる可能性があると考え分析対

象には含めなかった。人名・地名・建物名などは固有名詞とし、今回の集計には加えなかったが概ね90％以上が漢字表記となっており、各本に大きな差は見られなかった。

（３） 語の一部でも漢字表記しているものは漢字表記語として扱った。例えば「心さし」「しら雲」などの名詞は全体で一つの漢字表記名詞とした。

（４） 川口久雄解説（1985）『古本説話集』（勉誠社文庫124）所収の影印を用いて2000語程度の調査を行った。『古本説話集』は『宝物集』と同じ説話集であるが、和文系の文体を持ちひらがな主体表記と呼べる表記体系を持つ本である。

（５） 以下の語例でＫは光長寺本、Ｈは本能寺本、Ｓは最明寺本での出現数を表す。アルファベットの後の数字は「漢字表記での出現数：仮名表記（光長寺本ではカタカナ表記、本能寺本・最明寺本ではひらがな表記）での出現数」を表す。たとえば「K7：3／H11：0／S2：0」は光長寺本では漢字表記例７例・仮名表記例３例、本能寺本では漢字表記例11例・仮名表記例なし、最明寺本では漢字表記例２例・仮名表記例なしであることを表す。

（６） 竹内（1988）の『源氏物語』河内本での調査および柏谷（1988）の『校本枕冊子』の調査においても接頭辞「御」は漢字表記する傾向が強いことが指摘されている。

（７）「漢字表記優勢」とは各語において漢字表記での出現数が全体の出現数の65％以上を占めているものを指す。「仮名表記優勢」も同様である。

資料

小泉弘編『貴重古典籍叢刊８　古鈔本寶物集』角川書店　1973年

参考文献

柏谷嘉弘(1988)「仮名文字３　日記・随筆」佐藤喜代治編『漢字講座第５巻　古代の漢字とことば』明治書院 pp. 330-361

小泉弘（1971）『宝物集　中世古写本三種』古典文庫第283冊

小泉弘（1973）『貴重古典籍叢刊８　古鈔本寶物集　研究篇』角川書店

小泉弘・山田昭全・小島孝之・木下資一(1993)『新日本古典文学大系40　宝物集　閑居友　比良山古人霊託』岩波書店

小林芳規（1960）「平安時代の平仮名文の表記様式(Ⅰ)(Ⅱ)―語の漢字表記を主として―」『国語学』44号 pp. 52-68　45号 pp. 60-73

小林芳規（1971）「中世仮名文の国語史的研究」『広島大学文学部紀要』30　pp. 1-182

櫻井光昭（1990）「敬語の表記から見た『宇治拾遺物語』の文体」『国語語彙史の研究　第11集』pp. 63-80　和泉書院

菅原範夫(1979)「最明寺本宝物集総索引稿(一)(二)」鎌倉時代語研究会編『鎌倉時代語研究』第一集第二集

竹内美智子(1988)「仮名文字３　物語」佐藤喜代治編『漢字講座第５巻　古代の漢字とことば』明治書院 pp. 362-384

築島裕（1963）『平安時代の漢文訓読語につきての研究』東京大学出版会

橋本進吉（1939）「解説」『宝物集』古典保存会

藤井俊博（2016）『院政鎌倉期説話の文章文体研究』和泉書院

三角洋一（2007）「漢文体と和文体の間　平安中世の文学作品」東京大学教養学部国文・漢文学部会編『古典日本語の世界―漢字が作る日本』東京大学出版会 pp. 99-123

三角洋一（2011）「和漢混淆文の成立　漢字と仮名による表記をめぐって」東京大学教養学部国文・漢文学部会編『古典日本語の世界二―文字とことばのダイナミクス』東京大学出版会 pp. 87-115

三角洋一（2013）「まだまだある日本語文の表記法―和漢混淆文成立の周辺」國學院雑誌　114巻11号 pp. 200-213
峰岸明(1986)『平安時代古記録の国語学的研究』東京大学出版会
山田孝雄（1935）『漢文の訓讀によりて傳へられたる語法』宝文館

（かたやま・くるみ）